

辛

酸

辛酸

中央公論社

城山三郎

辛酸奥附
©一九七〇
検印廃止

昭和四十五年十月二十日 初版印刷
昭和四十五年十月三十日 初版発行
著者 城山三郎 発行者 山越 豊
発行所 中央公論社 東京都中央
区京橋二ノ一 振替 東京三十四番
印刷 三晃印刷 製本 小泉製本

定価 四五⑤円

辛酸目次

第一部 辛酸……………三

第二部 騷動……………二五

あとがき……………二〇九

辛

酸

翁の初めて鉆毒問題を議會に提出したるは、明治二十四年にあり。爾來議會の開くる毎に同問題を叫破せざること莫く、議論一たび鉆毒に涉れば、輒ち翁の鬚眉、異様の活氣を帯び來り、瞋目戟手と相應じて、怒罵百出し、其神激し氣昂るに及んでは、音吐破鐘の如く、唾沫四方に飛び、一道不穩の狂熱、沸々として満身の毛孔より噴射するものの如く、眼中また政府なく、議會なく、唯だ無告憐むべき鉆毒被害民あるのみ。

質問また質問、怒号に次ぐに怒号を以てして、声調次第に激越を加へ來り、終に社会の耳目をして、鉆毒問題に集中せしむるに至り、因循たる政府も、亦省覺する所ありしかども、其鉆毒に対する施設は、到底翁の希望に副ふべくもあらず。是に於て翁は、議會に叫号するの無益なるを悟り、断然代議士を辞して、鉆毒被害地方の一平民に返り、明治三十四年十二月十日、帝國議會開院式臨幸の時を窺うて、鳳輦に直訴するの非常手段を執れり。

抑も翁の鉆毒問題に奔走せる、前後殆ど二十余年、当初翁と志を同うし事を共にせる徒にして、最後まで運動を持続せるもの、幾何かある。或は権勢の圧迫により挫折し、或は財利の誘惑によりて軟化し去り、其否^いらざる者も、氣饑^{きけう}を力索きて、復讐起するの勇なし、翁独り其間に挺立して、終始一日の如く、健闘を続け、之が為に財産を失ひ、交遊を失ひ、地位を失ひ、窮難窮苦の中に困頓するも、心頭曾て鉆毒被害民を離れず、谷中村買収の事決せし後も、眷々として其善後策に執掌し、余力更に治水問題を研究して、地方百年の長計を確立せんとせり。

第一部 辛 酸

一

襦袢をぬいで真裸になった正造は、ほおっ、ほおう、と吠えるような声を立てた。焚きつけていた宗三郎は、思わず顔を上げた。

暗い古綿を浮べたまま寒々と暮れて行く空に、正造の大柄な体の輪廓が浮き上っている。骨組みはがっちりし、腹も突き出ているが、足腰の肉はいたいたいほどの削げ方である。

正造はもう一度吠えた。その声の分だけ、白い息が夕闇の中に流れる。凍てはじめた空気におのき、七十近い体からは自然にそうしたうめきが出てくるのだ。

「すまんのう」

大きな水音がして湯しづきが宗三郎の首すじに飛んだ。正造の体をのみこんで、円筒形の湯気が動く。

宗三郎は榛の枯枝をくべた。煙が強く眼にしみてくる。視線を外らすと、その先、かつての湯殿の礎石のかげに、ちびた下駄が片方だけすてであるのが眼についた。蜘蛛の巣にまみれ、灰黒色に変わっている中に、鼻緒がわずかに朱を残している。母のものが、それとも祖母のはき古したものなのだろうか。宗三郎は、別の枯枝でたぐり寄せようとした。

「いいお湯じゃ」

湯気にうるんだような正造の大きな声がした。

「家の衆より先に初風呂に入れてもらっては、申訳ないのう」

「こんな……。何が初風呂です」

はげしい宗三郎の口調に、正造は黙った。かたく凍てた夜気に、火の音がはじける。

「湯加減はどうでしょう」

「結構、結構。ありがたいほどの湯だ」

湯気の中で、正造の特徴のある慈姑頭がゆれた。伸び放題の蓬髪を藁で結んだのが、芽を出した慈姑のように見えるのだ。

「こんな初風呂なんて」

宗三郎は、またいまいましてそうにつぶやいた。

七月はじめ強制破壊でこわされてから、宗三郎の一家は堤外に残った勇蔵の家まで、月に三、四度もらい風呂に行っていた。だが、冬も迫り、乳呑児を抱えて往復一里近くもある道を出かけて行くのはいかにも大儀なので、破壊をまぬかれた風呂桶を思い切って野天にすえて、焚くことにしたのだ。広い洗い場のついた、村でも指折りのりっぱな湯殿をむざむざとこわされ、その跡でのふるえながらの野天風呂である。

誰のものともわからぬ古下駄を、宗三郎は手荒く炎の中にくべた。

「お前さんのところで風呂によばれようとは、思いもかけなかったよ」

いたわるような正造の声が降ってくる。宗三郎は反撥して、

「風呂なんて、水と焚木さえあればどこでだって……」

「そういうものじゃない」

正造の声に、はじめていつもの重みが戻った。

「風呂を焚いてくれるのは人間の心だ。心のゆとりだ。これほどひどい目に会いながら、なお人間の生活を護ろうとするお前さん方の心がうれしいのだ」

さとするというよりも、正造自身がそのあたたかみを自らたしかめている口調であった。宗三郎は顔を上げたが、深い夕霧と湯気で慈姑の先が見えるばかりである。声だけが流れてきた。

「村のことさえなけりゃ、このままここで成仏したい。きっと極楽浄土へ行けるぞ」

「とんでもない。こんなところでなんか」

「わしは村で死にたい。谷中の村で死なせて欲しい。どこの水塚のかげでも樹のほらでもいい。この村で野垂れ死にしたい。村以外にわしの死場所はない」

「でも、田中さんには佐野の家が……」

宗三郎は、佐野町で人に教えられてのぞいて見た正造の生家の家構えを思い出して言った。谷中救済の資金づくりのため抵当に入っているその家では、継母と夫人の女二人が帰るあてもない正造の留守を守ってくらしている。

「あの家はばあさんのためのものだ。ばあさんが亡くなれば、わしには用はない」

「奥さんは？」

「あれのことなんか」

正造は吐きすてるように言った。宗三郎はむっとして、

「でも、奥さんが……」

同じ屋根の下に住むこともなく、四十数年結婚生活を続けさせられている正造の妻が、若い宗三郎には不憫でならない。正造はまるで妻の存在をかえりみない。ことさらに蔑み捨ておくことに、よろこびを感じている節もあった。宗三郎はそうした正造の一面に腹立ちさえおぼえる。そ

れほど運動に熱中するくらいなら、なぜ結婚したのだ。自分はまだ十九だが、自分なら決して結婚はしないのに。

宗三郎は、そのことについて正造と議論したかった。四十いくつも年齢はへだたりながらも、正造はいつも自分を一人前の話し相手にとり扱ってくれる。だが、奥さんのこととなると、正造はたちまち口をつぐみ、不機嫌さではじけんばかりの顔になる。口にするのさえ沽券にかかわるというように。それには、いくらかの理由がないでもないのだが――。

宗三郎の心の中をよぎっているものを察して、その質問の先を封じるように、正造は湯の音を立てた。

背後から、兄の宗吉が呼びかける声が出た。

「宗三郎、湯加減を訊いたか」

水に備えて土を小高く盛り上げた水塚。九間に六間半という大きな構えだった家は跡形もなくこわされ、崩れた壁土と礎石だけが空しいひろがりを見せている。その先に、兄夫婦が立っていた。

宗三郎のうなずくを見て、二人の姿は消えた。冬を控え、仮小屋をたたんで、一家は穴ぐら住いに移ったところなのだ。二尺ほど水塚を掘り上げ、萱で編んだ網代が屋根代りにかぶせてある。二坪足らずのその穴ぐらが、四十坪の家に住んでいた六人家族の住いである。家具も調度も

量さえもない。それでも、篠竹四本を立て蚊帳を釣ただけで青天井の下で寝た破壊直後に比べれば、いくらかはましな住いといえるだろう。

枯枝を折る宗三郎の腕に、しだいに力が加わってくる。枝の折れる音そのものが、あの光景を呼びさますのだ。

二百人を越す警官たちのサーベルを下げた白い制服。狩り集められた人夫たちののしりさわぐ声。家財道具が次々に屋外に放り出され、屋根茅がはげしい音を立ててめくられる。祖父の代につくられたさし渡し一尺以上もある黒光りする大黒柱。安政の大地震にもびくともしなかったその柱に薫口が打ちこまれ、ロープがかけられ、あざけるような掛け声とともに倒されてしまった。舞い立つ土ぼこり。位牌を抱いてぼう然と壁土に埋まっている家族。しかも、そのぶち壊しの費用までこちらに払えと言うのだ。

すべてが国家の名で、国家の手で行われた。強制破壊にあった谷中堤内十六戸の残留民が国家に対して何の害をなしたというのだろう。かつて一反あたり八俵もとれた富裕な村をここまで追いこんだのは、足尾銅山とその銅山資本家の言うがままになっていた国家の方ではないか。鉱毒被害反対の急先鋒に立ったこの谷中村を買収し、遊水池として沈めてしまおうという策謀。中央政府の示唆によるその計画は、深夜、警官に守られた秘密会で県会を通過し、日露戦争で壮丁たちが大半は召集されて行った留守をねらって実行に移された。水害でこわされた赤麻沼に面した

堤防はわざと復旧せず、たまりかねて村民自身の手で村債を起し仮堤を築くと、県が人夫を傭って壊し、その破堤代も請求してくるという始末。示された水没補償金は、田一反三十五円という安値、墓地は一坪三錢三厘とハガキ二枚の代金である。低湿地で無収穫であるからというのが、その理由であった。堤防を壊して水の流れこむままにしておきながら、無収穫を口実にする。県はさらに追いうちをかけてきた。四十年には、前年の三十八倍という税が割り当てられた。村民による築堤費・県による破堤費の分担もある。凶作つづき。無気味に口を開けたままの堤防。憤りよりも不安が先に立った。居たたまれず買取に応じ、村民たちは離散して行った。

田中正造を中心に最後まで残留を決意したのは、四百戸中わずかに十九戸。それだけに、殺されても谷中を離れぬという執念一途にかたまった人々であった。その中、堤内にある十六戸に対して、県が法律の名によって報いたのが強制破壊である。移転先もきめぬままに、一挙に十六戸をぶち壊し、野天の下に放り出した。狂人の居る家も、鉋毒のため寝こんだままの病人のある家も、乳呑児を抱えた家も、容赦はなかった――。

湯の音がきこえなくなった。腰を浮かし、湯気を透して見る。風呂桶の縁に頭をあずけ、正造はうすく眼を閉じていた。手拭いが、いかにも不安定に慈姑の芽の上のっている。片方だけ大きい左眼の奥に一筋見える黒瞳には、柔和な光が宿っていた。買取問題が起ってからは神経過敏気味で激怒しやすく、容貌もけわしくなっていたのだが、いま湯気の中に見る顔は童顔そのもの

であつた。口もとの縦皺にも深い安らぎがある。

宗三郎の胸の中に湯氣が通つてきた。昂ぶり激していれば、心はひとすじの弓弦のように張りつめてゐる。宗三郎たちの環境では、それはそれなりに一つの救いかも知れない。心が和むと、きまつて、それとはうらはらにうつろな氣持がひろがつてくるのだ。世間はすでに谷中村問題は片づいてしまつたと思つてゐる。破壊された後まで、地に潜るようにしてねばつてゐる十六戸のことを考えない。東京から來てゐた学生たちも、すべて引き揚げてしまつた。こうして、見る人もなく、勝つあても闘う手ごたえもないような闘いを重ねて行く中に、宗三郎自身の人生はどうなつてしまふのだろうか。鉋毒水に浸つたまま、幹の髓までうつろになつて立ち枯れて行つた樹々のことを連想せずには居られない。次男坊で年も若い。その宗三郎のただ一度限りの人生が……。

五、六年も前であつたらうか。宗三郎はやはり正造のために風呂を立てたことがある。湯氣のこもつた湯殿の中では、正造の顔は見えず、声だけがこだまのようにひびいた。

「……このままでは日本は近く潰れる。潰さぬためには、坊のような若い者がしっかりしてくれらるゝことだ。しっかり学問をして、外国へも行つてくるんだ。学問は農学がよい。経済学でもよい。経済といふことをみっちり勉強してくるんだ。無知では救われないし、人も国も救えない」

それは、具体的に宗三郎の進学を指したわけではないかも知れない。しかし、その言葉が、宗

三郎の胸に学問への灯をともしたことも事実であった。子供心に英雄のように思いこんでいた正造からじかに聞いた言葉だけに、強烈であった。

だが、それから泥まみれの戦いの歳月、正造は二度と就学のことを口に出さなかった。学者の無能をののしり、へ百人の学生中、人民を救える学生が何人居るゝと笑う。へ万巻の書を読むより、土を食って育てゝとも言った。正造の本心はどこにあるのか。若い働き手で筆も弁も立つ宗三郎を、手もとから失いたくないのではないか。正造に認められようと子供心に発起して、書にも励み弁舌を練るのに努めたのが、宗三郎自身の人生にはかえって仇となったのではなからうか。

あたりにはじけるような音がするのにも気づかず、宗三郎は物思いにとらわれていた。

「雨じゃないか、宗三郎」

正造の大きな顔が、湯気の中から突き出て言った。霰あられかと思われるほど大きな水滴が、首すじ、つづいて手首を打った。体を立て直す隙にも、水雨は立てつづけに炎の中に音を立てる。散り残った公孫樹いちょうの葉が、たたき落されてくる。水塚をめぐる熊笹の茂みも、いっせいに気ぜわしい音を立てはじめた。家々がなくなってから、雨の音も、雨にこたえる草木の音も、ひとときわ荒み立つ感じであった。

荒席の上にぬぎすててあった正造の着物を、宗三郎はとっさに胸に抱きとった。傘を持ってこようにも、家に一本あるだけである。それも穴ぐらの屋根からの雨漏りを避けるため、一家六人

がその下に頭を突っこむためのものだ。体で正造の着物をかばい、中腰になったまま宗三郎は立ちすくんだ。

「わしはどうせ湯の中だ。早く、早く屋根を手伝ってやれ」

雨漏りを防ごうと、兄夫婦があわてて網代の上に藁束や戸板を重ねている。泣き出した赤ん坊と、三歳の姉娘を背と腹にかかえて、老母もうろたえている。

「早く行け。助けてやらんか」

正造にどなられ、宗三郎は中腰のまま飛び出した。老母の体を押して穴ぐらに飛びこむ。抱きついてくる女の子を引き離す。正造の着物を置き、その上に蓑をかぶせて外へ出た。かなりの大降りとなって、兄夫婦はすでに水をくぐったように漏れている。

雨にむせぶようにしてありあわせの藁束を網代にかぶせ、穴ぐらに戻った。幼児も赤ん坊も、どこかつねられているように泣く。

「田中さんを迎えに行かにゃ」

同じ言葉が、老母と兄の両方の口をついて出た。兄嫁をまじえて六つの眼が宗三郎を見る。

「でも傘が……」

穴ぐらの仮屋根いっぱいひろげていた破れ傘を、老母は惜しそうにたたんだ。仮屋根を透してすでに雨滴が漏りはじめている。姉娘が泣き声をはり上げる。そのとき、

「おう、おう、かわいそうになあ」

湯のにおいとともに、素裸の正造が入ってきた。兄嫁があわてて眼をそむける。

「ご無礼するのう」

正造はくしゃみしながら、宗三郎のさし出す着物をふやけた手にとった。

赤ん坊がひきつけるように泣く。

「雨が降ると、寝られないことがわかるんです。だから、こんなにうるさく……」

兄嫁が弁解するように言う。

「強制破壊の後、毎晩雷雨つづきで、ほとんど一週間の間、眠れなかったんです。すっかり痩せました。房助さんとこの子は、死んでもうて」

兄の宗吉も言葉を添えた。誰かをとがめるといふよりも、試練のあとを噛みしめている口調である。

素裸の正造にびっくりして黙りこんでいた姉嬢は、正造が古袴をつけ終ると、外へ出て行くのを見たのか、

「おじさん、連れてって。あたい、雨きらいだよ」

「よおし、よし。気の毒になあ」

正造はうるんだ声で言い、髪を撫ではじめた。そして、ふいに顔を斜めにふり上げると、